

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	高木啓吾教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Keigo Takagi
作成者（著者）	秦, 美暢
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(3). p.144 144.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.144
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD00930922

高木啓吾教授送別の辞

秦 美暢

東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野（大森）准教授

高木啓吾教授は、平成25年3月31日をもちまして東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野（大森）教授を定年退職されることとなりました。先生は、昭和47年3月、東邦大学医学部をご卒業後、国家公務員共済組合連合会虎の門病院外科レジデントとして3年間の研修を開始されました。昭和50年6月には国立がんセンター外科レジデント、昭和53年6月には国立療養所松戸病院（現国立がん研究センター東病院）外科医員に就任され、トップレベルの医療現場で研鑽を重ねられました。当時、国立がんセンターには、軟性気管支鏡を開発された池田茂人先生がおられました。のちに高木先生は、気管支鏡下の診断治療を極めるためには従来の硬性気管支鏡にも習熟する必要がある、と考えられて池田先生にご相談され、フランスのDumon先生へ紹介して頂いた、と伺っております。現在では気道狭窄に対する標準的治療の1つであるシリコン製Dumonステントですが、いち早く日本への導入を試みられたのが高木先生でした。残念ながら輸入等の問題で日本への普及にはさらに数年を待つ必要がありましたが、現在でも第一人者としてご活躍されております。

2年後の昭和55年6月には、防衛医科大学校第2外科助手に赴任されました。防衛医科大学校は昭和48年に創設され、国立がんセンターの尾形利郎先生が第2外科学講座を立ち上げられたばかりでした。第1期生卒業の年に赴任され、以後15年間を所沢の地でご活躍されることとなりました。Young Chest Conferenceという夜中まで1枚の胸部単純X線写真を細かく読み込む読影会を続けられました。胸部断層撮影や胸部CT、肺血管造影などと比較し、予想される手術所見について討論を交わすというもので、医学生や研修医に大きな刺激を与えていました。臨床では胸膜肺全摘など、多くの拡大手術に挑戦してこられました。平成5年には、肺癌のリンパ節マッピングで高名なMountain先生の米国テキサス州立大学M.D.アンダーソンがんセン

ター胸部外科で研修をされております。

平成7年9月、東邦大学医学部胸部心臓血管外科学講座に、ご卒業後23年を経て助教授として戻られました。肺癌と移植の二本立てを基本方針とし、生体肺移植を導入するプロジェクトを企画されました。翌平成8年9月より、米国南カリフォルニア大学医学部胸部心臓外科にご自身が留学されるとともに、肺外科医、心臓外科医、麻酔科医、看護師、理学療法士をチームとして米国研修に参加させました。経済的な障壁は高く、移植医療の実現はかないませんでした。多くの有形無形の学術的恩恵を東邦大学に残しました。

平成15年4月には、臓器別診療科再編成を背景として、東邦大学医学部附属大森病院呼吸器センターを設立され、呼吸器センター外科教授に就任されました。呼吸器センター内科には虎の門病院より中田紘一郎先生が就任され、のちに現教授である本間 栄先生が就任されて、10年をかけて現在の隆盛を作り上げてこられました。手術件数は年々増加して病院長表彰を受けられ、昨年は243例と赴任当時の倍増を達成されております。うち肺癌は95例、ステントは19例でした。医局員の指導では「屋根瓦方式」を実践されて常に後ろから見守り、多くの優秀な人材を学外へも輩出されております。学生の指導では連日朝6時から病棟実習を開始し7時半の回診から夜中のカンファレンスまでずっと密着しておられ、学生の選ぶ「Best Teacher」に選出されました。常に挑戦し続けるお姿は、今も少しも変わることはありません。ご退任後も、引退ではなく新たな挑戦である、と地域中核病院での呼吸器センター設立を計画されておられます。これまでの深い感謝とともに、高木啓吾先生のますますのご活躍とわれわれ東邦大学医療センター大森病院呼吸器センター（外科）の一層の発展を祈念して、送別の辞とさせていただきます。ありがとうございました。